

## 治療後の後悔をへらすために

～治療決定の際の共有意思決定（Shared Decision Making）の重要性～

### ポイント

- ・積極的監視療法、放射線療法、手術療法を行った前立腺がん患者の治療後の後悔を定量的に評価。
- ・治療決定時の医師－患者の双方向の情報共有、治療後の QOL が治療後の後悔をへらすことを実証。
- ・患者の治療後の後悔をへらすため、治療決定時の共有意思決定の重要性を提言。

### 概要

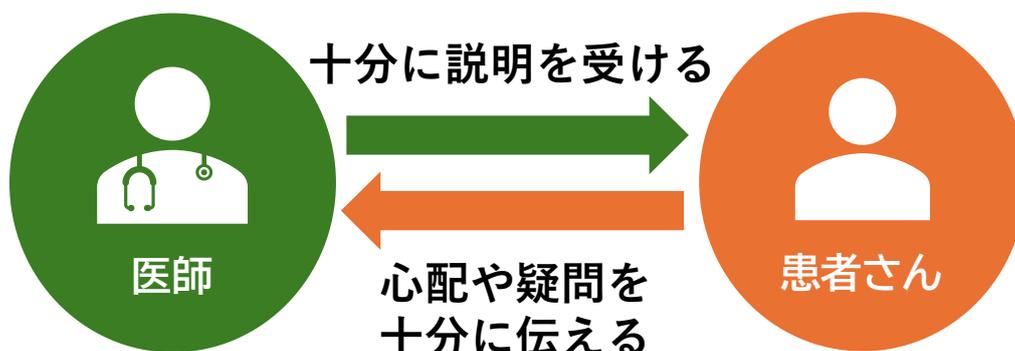
北海道大学大学院保健科学研究院の佐藤三穂准教授、北海道大学病院泌尿器科の大澤崇宏講師らの研究グループは、前立腺がんと診断され手術療法、放射線療法、または積極的監視療法の治療を選択した患者さんの治療後の後悔に関する研究結果を論文報告しました。

早期の前立腺がんは、手術療法、放射線療法、積極的経過観察（監視療法）のいずれの治療を選択しても同程度の予後が示されており、長期の生存期間が得られることから、がんサバイバーの治療後の満足度を改善することは重要な課題です。そこで本研究では、前立腺がん患者さんの治療後の後悔を Decision Regert Scale を用いて定量的に評価し、治療意思決定のプロセス、及び治療後の健康関連 QOL が後悔に及ぼす影響を明らかにすることを目的としました。

治療決定時に医師から十分な説明を受け、かつ医師へ心配や疑問を伝えることが十分できたと回答した患者さんは後悔度が低いことが明らかとなりました。一方で、手術療法、放射線療法、積極的経過観察（監視療法）の治療3群で後悔度を比較したところ、差は認められませんでした。しかしながら、治療後の排尿機能、排便機能、ホルモン機能における QOL が不良な患者さんにおいて、後悔度が高い結果でした。興味深いことに、治療後の QOL が不良な患者さんでも、治療決定時に医師から十分な説明を受けたと回答した患者さん、医師へ心配や疑問を伝えることが十分できたと回答した患者さんは、そうでない患者さんと比較して後悔度が低いという結果でした。

本研究は、前立腺がん患者さんの治療後の後悔をへらすためには、治療決定時の共有意思決定\*1（Shared Decision Making）及び治療後の QOL の維持が重要であることを示しました。

なお、本研究成果は、2024年10月9日（水）公開の International Journal of Urology 誌に掲載されました。



双方向の治療意思決定のプロセスが、治療後の後悔をへらす

## 【背景】

前立腺がんは、prostate-specific antigen (PSA) 等の診断技術の発達で早い時期に診断されることが多いがんです。早期の前立腺がんは、手術療法、放射線療法、積極的経過観察（監視療法）のいずれの治療を選択しても同程度の予後が示されており、長期の生存期間が得られることから、がんサバイバーの治療後の満足度を改善することは重要な課題となっています。

しかし国内において、実際に治療を受けた前立腺がん患者さんの後悔度を評価し、どのような要因が後悔に影響を与えるかを明らかにした研究は行われていませんでした。

## 【研究手法】

前立腺がんと診断された患者さんを対象とし、質問紙調査と診療録調査を実施しました。治療後の後悔は Decision Regret Scale 日本語版を用いて評価しました。意思決定プロセスについては、医師から十分に説明を受けたか、医師に治療に関する心配や疑問を十分に伝えたかについて尋ね、現在の QOL については、前立腺がん患者さん用の QOL 質問紙である Expanded Prostate Cancer Index Composite 日本語版を用いて評価しました。

## 【研究成果】

371 名が解析対象となり、その内訳は手術療法が 149 名、放射線療法が 202 名、積極的経過観察（監視療法）20 名でした。治療から調査の回答までの期間の中央値は 64 ヶ月でした。これらの治療 3 群で後悔度を比較した時に、有意な差は認められませんでした。一方、治療決定時に医師から十分な説明を受け、かつ医師へ心配や疑問を伝えることが十分できたと回答した患者さんは後悔度が低いことが明らかとなりました（図 1）。また、治療後の排尿機能、排便機能、ホルモン機能における QOL が不良な患者さんにおいて、後悔度が高い結果でした。治療後の QOL が不良な患者さんでも、治療決定時に医師から十分な説明を受けたと回答した患者さん、医師へ心配や疑問を伝えることが十分できたと回答した患者さんは、そうでない患者さんと比較して後悔度が低いという結果でした。

## 【今後への期待】

本研究は、前立腺がん患者さんの治療後の後悔をへらすためには治療後の QOL の維持が重要であることに加え、治療決定時の医師－患者の双方向の情報共有が後悔に関連することを明らかにしました。本研究は、医師と患者さんで共同して治療の意思決定をしていく共有意思決定（Shared Decision Making）の重要性を示しました。今後は、限られた資源の中で、いかに共有意思決定を促進していくかが大切であると考えます。

## 【謝辞】

本研究は JSPS 科研費 JP23K09923 の助成を受けたものです。

## 論文情報

論文名 Decision regret after curative treatment and its association with the decision-making process and quality of life for prostate cancer patients (前立腺がん患者における根治治療後の後悔と意思決定プロセス及びQOLとの関連)

著者名 佐藤三穂<sup>1</sup>、大澤崇宏<sup>2</sup>、西岡健太郎<sup>3</sup>、宮崎智彦<sup>4</sup>、高橋周平<sup>4</sup>、森 崇<sup>4</sup>、橋本孝之<sup>3</sup>、宮田 遥<sup>2</sup>、松本隆児<sup>2</sup>、安部崇重<sup>2</sup>、大橋和貴<sup>1</sup>、村井祥代<sup>2</sup>、伊藤陽一<sup>5</sup>、篠原信雄<sup>2</sup> (<sup>1</sup>北海道大学大学院保健科学研究院、<sup>2</sup>北海道大学病院泌尿器科、<sup>3</sup>北海道大学大学院医学研究院医理工学グローバルセンター、<sup>4</sup>北海道大学病院放射線部、<sup>5</sup>北海道大学病院医療・ヘルスサイエンス研究開発機構データサイエンスセンター)

雑誌名 International Journal of Urology (泌尿器科学の専門誌)

DOI 10.1111/iju.15602

公表日 2024年10月9日(水)(オンライン公開)

## お問い合わせ先

北海道大学大学院保健科学研究院 准教授 佐藤三穂 (さとうみほ)

T E L 011-706-3337 F A X 011-706-3337 メール m\_sato@med.hokudai.ac.jp

U R L <https://www.hs.hokudai.ac.jp/>

## 配信元

北海道大学社会共創部広報課 (〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目)

T E L 011-706-2610 F A X 011-706-2092 メール jp-press@general.hokudai.ac.jp

## 【参考図】

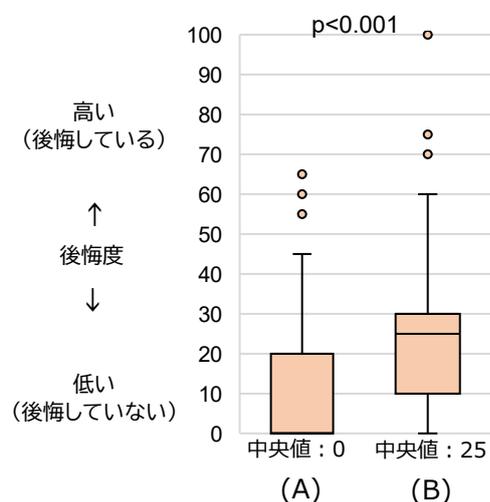


図 1. 後悔度の比較

(A) 医師－患者の双方向の情報共有が十分にできたと感じた患者さん (126名)

(B) 医師－患者の双方向の情報共有が十分にできていなかったと感じた患者さん (242名)

## 【用語解説】

\*1 共有意思決定 … 患者さんと医療者が共にもつ情報を共有し、話し合っって意思決定する方法。